

19.

俳句は短い韻文詩であるから、単純化して詠み込む方が得である。何もかも押し込めようとしてもだめである。

複雑な人間関係とか社会思想とかは俳句では重荷になる。そのにおいというものを感じさすしかできない。そういう場合省略ということを考えなければならない。省略してワンポイントを強く打ち出すので、叫びのようなものだと思う。詠嘆である。

月さして一間の家でありにけり 村上鬼城

もっと簡単にすれば「月さして一と間」で自由律でゆけばよろしいが俳句が五七五調と季語を守らねばならないので、右掲の句が出来た。下の「の家でありにけり」は重要な意味を持つ言葉ではなく、いわば虚字である。しかし俳句の余韻余情はこの虚字に因るのでこれを大事と考えてもらいたい。

要するに単純化と言うことは余韻余情を生み出す簡潔さであって、謙虚な態度なのである。音楽に「間」というものの効果を必要とする。短い俳句にも同じことである。

20.

氷山の一角という譬えは俳句に一番よく通じる。

ということは、俳句は最も短く小さい形の文学である。しかし俳句に含まれる内容は非常に大きい。測り知られぬ余情の広がりがあるからである。

海面に出て我々の目に映る氷山と、海中に隠れ沈んで我々の目には見えない部分（これは七倍の大きさがある）とを連ねて見ると実に大きな氷山として驚異に値する。

目に見えるものから目に見えないものへと伸ばして全体をひっくるめて鑑賞するように俳句という短い文学が生きているのである。

季語、切字、省筆、謙虚などは俳句に必要とされる。それは俳句の内容を大きく盛るためにする手段でもある。

21.

ある対象にぶつかって我々は興奮する。驚きを受ける。なんとかそれを言い現したくて仕方がない。

我々はそれを直感と呼び、直感を逃がさないようにして読者に訴えるのである。

だが、このとき誰も彼もが知っている概念にもたれかかって概念で説明するからいけないのである。概念はつまり常識であって、作者の生々の直感がない。

その直感が通じぬ場合もあろうが、工夫すれば通じる。いな、通じないとしても。概念にごまかされるよりは作者にとっては大切な直感であり、創造であり、その人のものになるのである。例えば、

十葉の花に五弁がありたるよ 高浜虚子

十葉の花は四弁の花で、五弁はめったにないことは、十葉の花を見る人の常識である。だから十葉といえはああ十字形した白い四弁の花とすぐ頭に浮かぶ。

ところが虚子先生の驚きは五弁を発見してこれはまあと叫ばれた。五弁がありたるよという直感を我々に示した。

常識を超えたところに魅力があるのであって、四弁だと言ったのでは常識で誰でもよく知っているから。興味がわからないのである。

つまり四弁の中に紛れ込んで五弁のあること、自然の持つ不思議があるというのが大変面白いと言ってよいのである。